

マニラ建築散歩

スペインとアメリカが残した都市遺産をめぐる

【文】 澤田公伸 【写真】 ERIK LIONGOREN

スペインとアメリカが、かつてフィリピン統治の拠点としたマニラ。

16世紀から300年以上も統治したスペインは、この地に石造りの建築群とカトリシズム、言葉を残した。フィリピンの主要言語であるタガログ語には、スペイン語起源の単語が約4割も占めるといわれる。

19世紀末に

フィリピン

の領有権

を手に入

れたアメリ

カは、教育と

民主主義、そし

て当時最新のアメ

リカ式都市計画を携え

てやって来た。

マニラ湾に注ぐパシッグ川の河口に、この植民史を今に残す建築群がある。戦火を経て修復・再建されたこれらの建物をめぐる時、この地に刻まれた数百年の年月が目の前に蘇ってくる。





3

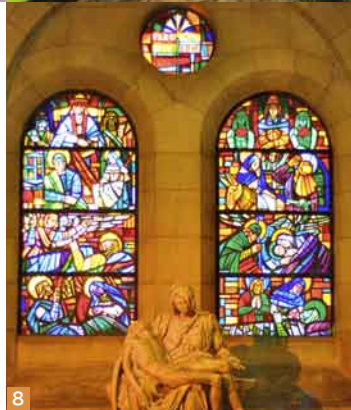


2



1

1 サン・アグスチン教会の建設には中国人も動員され、入口には中国風の獅子も立つ 2 カーサ・マニラ博物館のパティオ(中庭) 3 サン・アグスチン教会の正門は楯(ナラ)の木の一枚板で作られ、精巧な彫刻が施されている 4 サンチャゴ要塞の石組みの正門にはスペイン兵士の彫刻がある 5 ローマ広場の噴水付近から見たマニラ大聖堂 6 イントラムロス内には高校や大学も多く、城壁跡で語らう学生たちの姿をよく見かける 7 マニラ大聖堂の外壁にある彫刻は南国らしくバイナッフルだ 8 マニラ大聖堂内の美しいステンドグラス



8



7



6



5



4

マニラ建築散歩

スペインとアメリカが残した都市遺産をめぐる

この教会の向かいには、当時のスペイン人の支配階層の家を再現したカーサ・マニラ博物館もある。「バーハイ・ナ・バト(石造りの家)」と呼ばれ、18世紀ごろから19世紀末にかけて盛んに造られた建築様式だ。1階が石造り、2階から上が木造建築になっている。クリーム色の木製の窓にはカピス貝と呼ばれる貝殻がはめ込まれ、日本の障子窓のように左右に滑らせて開け閉めする。その障子

マニラ大聖堂の南側にあるのは、1571年のスペインによるマニラ占領と同時に基礎が作られたというフィリピン国内最古のサン・アグスチン教会だ。バロック式教会建築としてユネスコの世界遺産に指定されており、細密な遠近法で描かれた天井画、装飾品、美術品もすばらしい。

この教会の向かいには、当時のスペイン人の支配階層の家を再現したカーサ・マニラ博物館もある。「バーハイ・ナ・バト(石造りの家)」と呼ばれ、18世紀ごろから19世紀末にかけて盛んに造られた建築様式だ。1階が石造り、2階から上が木造建築になっている。クリーム色の木製の窓にはカピス貝と呼ばれる貝殻がはめ込まれ、日本の障子窓のように左右に滑らせて開け閉めする。その障子

マニラ大聖堂の南側にあるのは、1571年のスペインによるマニラ占領と同時に基礎が作られたというフィリピン国内最古のサン・アグスチン教会だ。バロック式教会建築としてユネスコの世界遺産に指定されており、細密な遠近法で描かれた天井画、装飾品、美術品もすばらしい。

この教会の向かいには、当時のスペイン人の支配階層の家を再現したカーサ・マニラ博物館もある。「バーハイ・ナ・バト(石造りの家)」と呼ばれ、18世紀ごろから19世紀末にかけて盛んに造られた建築様式だ。1階が石造り、2階から上が木造建築になっている。クリーム色の木製の窓にはカピス貝と呼ばれる貝殻がはめ込まれ、日本の障子窓のように左右に滑らせて開け閉めする。その障子

マニラ湾に沿ってロハス大通りを北上し、マニラ・ホテルを過ぎると、すぐ右手に城壁が現れる。スペイン統治時代の城壁都市イントラムロスだ。時は1565年。すでにスペイン遠征隊がスペイン皇太子フェリペにちなんでフィリピンと名づけていたこの諸島に、スペイン領ヌエバ・エスパニーヤ副王領の首都だったメキシコから、征服者のミゲル・ロペス・デ・レガスピが艦隊を率いてやって来た。

レガスピはセブを占領した後、初代フィリピン総督となり、北上してイسلام系原住民がいたマニラも攻略。マニラ湾に注ぐパシッグ川の河口付近にスペイン人の居住区を兼ねた城塞を築いた。もともと土塁に囲まれていたこの城塞は、1574年の中国人海賊リマホン(林鳳)による激しい襲撃で海賊たちが城塞の中まで押し寄せたため、石組みの頑強な城壁に補強されたという。こうして、スペイン語で「壁の内側」という意味の「イントラムロス」は完成し、300年以上の間、スペインによるフィリピン統治の中心として栄えた。

まずイントラムロスの西口から入り、パシッグ川に面したサンチャゴ要塞へ向かおう。ここには当時、スペイン部隊の兵站基地があり、中国人や日本人の海賊による襲撃や、ポルトガルやオラン

城壁都市イントラムロス

マニラ湾に沿ってロハス大通りを北上し、マニラ・ホテルを過ぎると、すぐ右手に城壁が現れる。スペイン統治時代の城壁都市イントラムロスだ。時は1565年。すでにスペイン遠征隊がスペイン皇太子フェリペにちなんでフィリピンと名づけていたこの諸島に、スペイン領ヌエバ・エスパニーヤ副王領の首都だったメキシコから、征服者のミゲル・ロペス・デ・レガスピが艦隊を率いてやって来た。

窓のような3階の窓から外を見やると、マニラ大聖堂が見えた。当時、当主が故郷スペインの面影を追っていた情景が目に見えかぶるようだ。

米国人設計士の「大都市計画」

イントラムロスの南側の門を出て、城壁の周囲を散策してみよう。城壁の周囲には、中世の趣を残す城内とは対照的に、フィリピンを統治したもうひとつの大国、アメリカが残した都市計画の見本市のような建物が立ち並んでいる。

1898年の米西戦争に勝利し、スペインからフィリピンの領有権を得たアメリカは、フィリピンの独立派勢力を制圧し、マニラに植民地政府を置いた。そして、シカゴやワシントンDCなどの

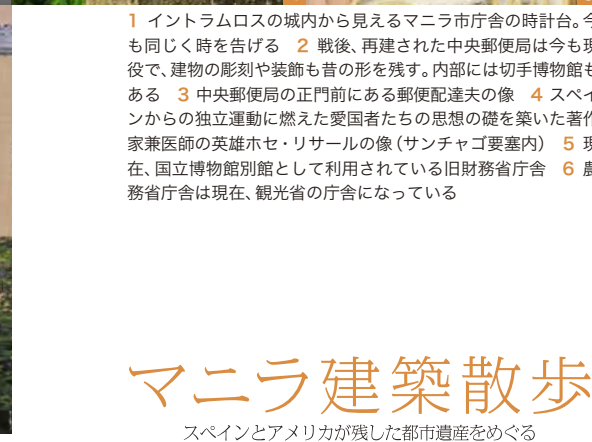
都市計画を担った都市設計家、ダニエル・バーンハム（1846〜1912）を呼び寄せ、マニラに一大都市の建設を試みた。

バーンハムは、当時、イントラムロスの南隣にあったウォーレス公園（現リサール公園）にマニラ湾が一望できるように植民政府庁舎を並べる計画を立てた。しかし、予算不足や本国の政策転換もあり、結局、計画通りに建設されたのは、国会図書館（後に国会議事堂として使われ、現在は国立博物館本館）、財務省庁舎（現国立博物館別館）、農務省庁舎（現観光省庁舎）の三つだけだった。

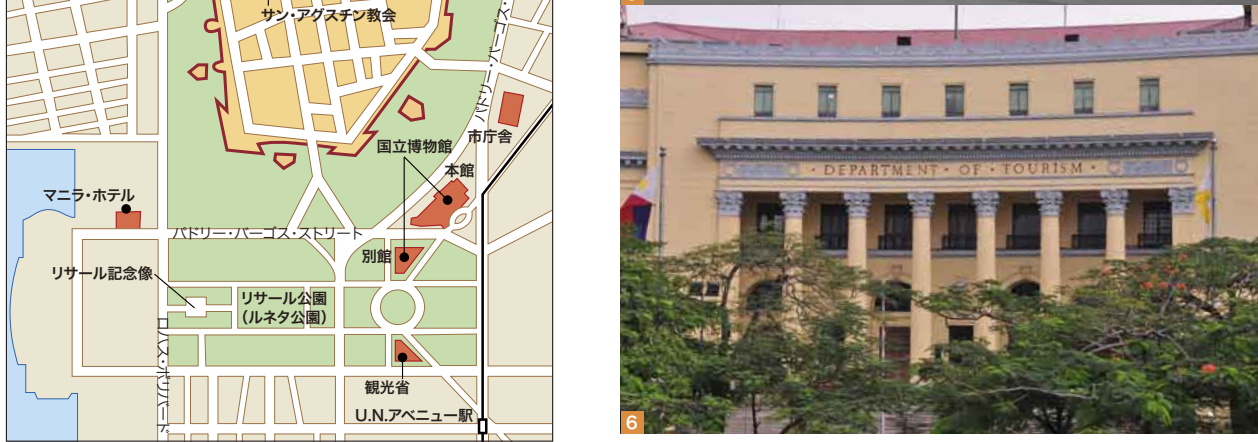
後にバーンハムがやり残した都市計画に基づき、イントラムロスの東隣に中央郵便局とマニラ市庁舎が建設された。1926年に完成した中央郵便局は新古典主義の様式で、郵便局とは思えない

重厚な建物だ。マニラ市庁舎は、アメリカ政府からコモンウェルス（独立準備政府）の樹立が認められ、フィリピンの独立に向けた新しい時代が始まった4年後の1939年に完成した。二つともフィリピン建築家による設計だ。

太平洋戦争初期、マニラに侵攻した日本兵たちは、近代化されたマニラの街に驚いたという。しかし、その建物群のほとんどが日米両軍による市街戦で大きなダメージを受けた。戦後、独立を果たしたフィリピン政府は、まずアメリカ統治期の建物の再建から始め、マルコス政権下、1980年代までにイメルダ大統領夫人が中心となり、イントラムロスが再建された。かつての姿を取り戻したこれらの建物は、激動の歴史を語りかけてくれる。



1 イントラムロスの城内から見えるマニラ市庁舎の時計台。今も同じく時を告げる 2 戦後、再建された中央郵便局は今も現役で、建物の彫刻や装飾も昔の形を残す。内部には切手博物館もある 3 中央郵便局の正門前にある郵便配達夫の像 4 スペインからの独立運動に燃えた愛国者たちの思想の礎を築いた作家兼医師の英雄ホセ・リサールの像（サンチャゴ要塞内） 5 現在、国立博物館別館として利用されている旧財務省庁舎 6 農務省庁舎は現在、観光省の庁舎になっている



マニラ建築散歩

スペインとアメリカが残した都市遺産をめぐる